論　文 ニダバ (*Nidaba*) 32(2003), 1-9

アメリカにおけるビューラー

植　田　康　成

0 はじめに

カール・ビューラーは、1879 年 5 月 27 日ドイツ・ハイデルベルク南の村メッケスハイム(Meckesheim)で生まれ、1903 年フライブルク大学で医学の学位、翌年にシュトラスブルク大学で哲学の学位を取得する。ボン大学、ベルリン大学で心理学を学び、1905 年ビュルツブルク大学で O・キュルペの助手となる。1909 年キュルペと共にボン大学に移り、1913 年にキュルペがミュンヒェン大学教授となったときにも行動を共にしている。1915 年キュルペが急逝し、ビューラーが彼の後を引き継ぐ。1916 年シャーロッテと結婚する。1918 年ドレースデン工科大学に正教授として赴任する。4 年後の 1922 年、心理学の正教授としてウィーン大学に赴任。以後 1938 年まで、ビューラーにとって、一番実り多い研究者生活が続く。しかし、このウィーンでの生活は、1938 年 3 月のナチスのウィーン侵攻によって、突然に終止符が打たれ、亡命を余儀なくされる。1938 年の夏、ベルリン経由で、ノルウェーのオスロに逃れる。そして、オスロ経由で、ビューラーがアメリカに亡命していったのは、1940 年である。まず、ビューラーは、ミネソタ州ダルース、そしてセント・ポールに居住する。セントポールのカレッジで心理学を教えている。1945 年にカリフォルニア州、ロサンジェルスに移り、1963 年 10 月 24 日、そこで生涯を終えた。

本論文では、ビューラーの研究生活に大きな転換を強いた亡命という体験以後、ビューラーがアメリカで書き残した原稿に基づいて、彼の言語理論に関する考察の展開を追うことを目標とする。

1 ビューラーの研究について

ビューラーの研究の対象は、まず生物学であった。医学の基礎として当然である。この生物学への関心は、生涯にわたって持続する。

ビューラーが研究者として名を知られるようになるのは、新進気鋭の実験心理学者としてである。ビューラーが 1907 年に発表した思考実験に関する博士論文に、当時

の心理学の権威ブントが批判の論を発表し、すぐさまビューラーもそれに応じた。このブントとの論争によって、ビューラーは、一躍有名となる。以後、3 分の 1 世紀に及んでビューラーは、ヨーロッパの心理学をリードしていく。

ビューラーは、心理学者として思考に関する研究から、徐々に言語の研究に重点を移していく。1909 年にフランクフルトで開催された第 3 回実験心理学会における発表「正常心理学の立場からの言語理解について」を、ビューラーの言語理論的研究の始まりと見なすことができる。これ以後、ビューラーの関心は、常に言語を軸にして、展開していく。

2 言語理論の展開（略述）

そのビューラーの言語理論の展開は、3 つの時期に分けて捉えることができる。言語の機能に関する考察、最終的には言語の機能モデルを中心とする言語学の公理系の完成という点から、生成期、体系期、拡張期という 3 つを区別することができよう。つまり『言語理論』(1934)の出版がビューラーの言語理論展開の分岐点になっているという考えである。

2.1 生成期

生成期は、公刊されている論文でいえば、「音声学と音韻論」(1931)までと考えることができる。言語が記号であるという洞察は、音声学と音韻論を区別する「抽象の有意義性の原理」の確立によって初めて可能となる。その原理が明確に提示されたのが、「音声学と音韻論」であった。

2.2 体系期

人間言語とは何か。人間言語を特徴づけるものは何か。ビューラーによると、それは『言語理論』において提示された 4 つの公理(A)-(D)であるということになる。ミツバチやアリの言語、動物の言語との違いは、これら 4 つの公理を満たしているかどうかにある。ビューラーの公理系は、人間言語一般に関する規定であると同時に、言語学的に言語を探求する際の言語の諸側面を規定したものでもある。

2.3 拡張期

ビューラーの言語学の公理系は、しかし、『言語理論』で提示されたものが最終的なものではない。言語の機能モデルに従えば、『表現理論』(1933)、『言語理論－言語の叙述機能』(1934)に続いて、少なくとも言語のアピール機能に関する著述がなされるべきであることが自明である。実際ビューラーは、その方向で考察をさらに展開している。言語のさまざまな現象形態のひとつとして、言語作品（言語芸術、詩作品）に関する考察が大きな課題としてあったことは確かである。これについては、遺稿に関してさらに述べる。

3 ビューラー遺稿との取り組み

3.1 レープツェルテルンによる遺稿出版（1969）

ビューラーの遺稿整理に手をつけたのは、レープツェルテルンであった。レープツェルテルンは、ほぼ完全に整った「印刷可能な状態」(druckfertig)の原稿だけをより分け、『生命体の体内時計および遺稿断片』(LEBZELTERN 1969)として出版したのであった。そしてそれはシャーロッテ・ビューラーの願いに応じたものでもあった。レープツェルテルンの貢献は、地道かつ精力的な調査によってビューラーの伝記を書き上げたことにある。現在時点まで、レープツェルテルンの伝記以上に詳細なものは書かれていない。

3.2 カーミによる遺稿整理および言語理論に関する論述（1980）

本当の意味でビューラーの遺稿整理を手がけたのは、従って、カーミである。彼女は、言語理論に関する遺稿を中心に内容的な分類整理を試み、それに基づいて博士論文(CAMHY 1980)を書いている。カーミによって言語理論に関するものとして分類整理された原稿は、1800 枚ほどにのぼっている。カーミは、テーマに従って、49 の原稿にまとめ、Sp1 から Sp49 の記号と、それぞれの原稿にタイトルを付している。しかし、カーミによって付されたタイトルは、必ずしも原稿の内容と一致してはいない。一例として、カーミが"Sp19 Zahlen, Zeichen und Begriff"と分類整理している原稿についていうならば、この原稿には、心理学に関する原稿が混在している。そして、カーミが付したタイトルは、この原稿の第 1 番目に記されているものであり、2 枚目以後は、よく読んでみると「文」に関する論述となっている。実際にビューラー自身が紙の右肩に Satz と内容を明記している。

3.2 エシュバッハによる遺稿整理およびビューラー著作集について（2000）

エシュバッハは、『ドイツ言語学事典』の中で、カール・ビューラー遺稿の整理作業が進行中であること、そして近い将来において、カール・ビューラー著作全集が刊行される予定であることを述べている(ESCHBACH 1980)。そしてエシュバッハは、その後、ビューラーの遺稿に基づく論考を幾つか公にしている。エシュバッハが収集したビューラーの遺稿は、筆者の知る限りオランダ・ニメゲンの心理言語学研究所に保管されている。

エシュバッハとの交信によると、ビューラーの著作集は、ドイツ・フランクフルトのズーアカンプ社から出版予定であった。しかし、予告から 20 年が過ぎてもまだ著作集は出版されなかった。多くの人々が忘れ去ったかと思われた 2000 年初頭にケルン郊外のフェルブリュック社から著作集 8 巻が出版されるという予告とともに、著作集の第 4 巻である『心理学の危機』が出版された。その予告によると、著作集の第 8

巻が遺稿集となるはずである。しかし、後続の巻はその後一向に出版される気配がない。

3.4 筆者による遺稿整理(2001-2003)

オーストリア・グラーツにある「オーストリア哲学のための研究所」には、ビューラーの遺稿の多くが保管されている。エシュバッハが独自で収集した遺稿は、エシュバッハの言葉によると相当量にのぼるようであるが、グラーツに保管されている遺稿と、ニメゲンに保管されている遺稿が、どれだけ重なっており、どれだけ異なっているかは、現在段階では不明である。

「保管」されているといったが、研究者が有効に利用できる形で保管されているわけではない。「死蔵」されてきたといっていい。前所長のハラー教授は、そのことを非常に嘆いていた。ビューラーの遺稿に関心をもって、ビューラー研究に携わっている人間は、数人程度である。そういった状況の中で、前所長ハラー教授の 3 度に及ぶ要請に、長い間逡巡したのち、筆者はようやく非力をも顧みず、全力投入する腹を決めて、遺稿整理の仕事を引き受ける返事をしたのである。ハラー教授との話し合いでは、遺稿整理・分類の仕事は 3 年計画で遂行するということになった。

初年度(2001)は、言語理論に関する遺稿整理を目標とした。2 年目(2002)は、心理学に関する遺稿の整理を目標とした。3 年目(2003)は、生物学に関する遺稿整理が目標である。そして全体的なまとめを行うというのがおおよその目標である。遺稿整理そのものは、原稿を内容別に分類し、ビューラーが原稿にタイトルを付しているものはそのタイトルを採用し、タイトルがないものについては、整理のため、内容を考慮して筆者がタイトルを与えるということにした。そして時代別に配列するということを目標とした。ビューラーが生前に発表した論文、著作の年代順のリストを作成し、遺稿原稿を位置づけていくということが目標となる。

しかし、言語理論に関する遺稿を時代順に配列するという作業は難航を極めて、完全にその年代を確定することは不可能であった。しかし、おおよその順序は確定できた。内容的にも、整合的な整理ができたと言える。分量からいうと、言語理論に関する原稿が一番多い。その意味で、計画実行初年度の 2000 年に 6 ヶ月グラーツに滞在して、言語理論に関する遺稿整理の仕事を行うことができたのは、幸いであった。心理学に関する遺稿についても、どのような仕事を進めていけばいいのか、おおよその輪郭を描くことができた。

2002 年は計画第 2 年目ということになるが、心理学に関する遺稿を整理するのが目標である。これは、内容的、時代的の両面から行われる。平行して、未発表の論考をタイプし、コンピュータで処理できる形のデータとして保存することも行った。未発表の原稿の中では、教育心理学的な内容のものが興味深い。現在まで公刊されてい

るビューラーの論文には、この方向の考察は 3 つしかない。人格に関する心理学的な考察を内容とするものである。現代の教育問題を考える際にも有益と思われる考察を行っていると筆者は見ているが、専門家にとってはどうであろうか。

4 アメリカにおけるビューラー

4.1 3 つの主題

ビューラーは、1940 年からミネソタ州・セントポールの短期大学で、理論心理学、実験心理学といったテーマのゼミを行っているが、そこでも言語理論を取り扱っている。アメリカにおいてビューラーが行った言語理論的考察は、大きくいって、3 つの分野に分けることができる。

4.2 公理(C)の展開

ひとつは、『言語理論』における公理(C)でいわれている言語作品(Sprachwerk)に関する考察である。公理(C)は、言語形成体の諸側面を取り扱っていると言えるが、ビューラーは、アリストテレス以来の詩学の伝統を踏まえながら、彼の言語理論の中で言語作品をどのように捉えるべきかについて、考察を展開している。言語の機能モデルに従えば、言語作品は、代表的には詩がそうであると言えるが、表出にかかわる。またアピール機能ともかかわっている。当然ながら、それは、叙述を前提としている。他方、ビューラーは、言語の第 4 の機能として詩的機能を考えていたようでもある。遺稿に次のような文章がある。

"The fourth aspect is concerned with art. How does the poet use language? To represent the world through words, means to master it in an abstract way. Yet it seems that the poet has to accomplish something else, even its contrary. For like every other artist he works and creates in the realm of senses, of visuality." ([12753])（第 4 番目の側面は、芸術にかかわっている。詩人は言語をどのように用いているのか。言葉によって世界を表示することは、言葉を抽象的に駆使することである。しかし、詩人はそれとは別の対照的なことを成し遂げなければならないと思われる。というのは、いずれの芸術家もそうであるが、詩人も感覚、視覚の領域で作品を創造しているからである。）

しかしながら、ビューラーは、言語の詩的機能を、言語に内在するものとは考えていない。それはあくまでも言語のひとつの使用法である。この点において、言語の詩的機能を、叙述的機能の弁証法的否定として捉えるプラーグ美学派を代表するムカジョフスキーの考えとは、必ずしも同一ではない。弁証法というものは、ビューラーにとっては、馴染みのある思考法ではなかった。

4.3 メタファー考察

第 2 に、ビューラーは、メタファーについて考察を展開している。ビューラーのメ

タファー考察は、スペインの哲学者オルテガ・イ・ガセットが唱えているイメージ破壊論に対する批判として展開されている。オルテガが言語におけるイメージ、メタファーを攻撃するのは、それなりの理由がある。曖昧な言葉遣い、感化的な言葉遣いを避け、事実に即した表現を用いることの重要性を唱えている。とりわけ政治的言説に典型的に観察される煽動的な言葉遣いに警鐘を発しているのである。しかし、あまりにもラディカルな主張には、ビューラーは与できなかった。言語の生命ともいうべきメタファーを根絶するということには、賛成できなかった。ビューラーは、次のように述べている。

"But I am afraid I must confess that I cannot believe in (...) Gasset's radical intentions to purify language of its images and figures. I say once more: not only to suppress but also to render prominent certain attributes the second indispensable process is neglected in these theories of metaphor. And it is the positive side of the process."([12760]) （しかしながら、正直に言って、言語からイメージおよび比喩を取り除いて言語を浄化しようというガセットのラディカルな考えは、とても信じることができない。繰り返しになるが、言語の顕著な属性を押さえ込むことだけでなく、それだけを助長することによっても、第 2 番目の不可欠なプロセスが、この種のメタファーに関する理論においては、ないがしろにされている。しかも、それはこのプロセスが有しているポジティブな面なのである。）

ビューラーは、『言語理論』第 23 章で、メタファーについて論述している。そこではメタファーに関する言語学的分析が中心となっており、メタファーの果たしている認識的機能については取り扱われていない。ビューラーは、上の引用にあるように、メタファー擁護論を展開する根拠として、新しい認識の獲得ということを主張している。これは、近年の認知意味論が主張していることでもある。

4.4　実用意味論の展開

第 3 番目に、ビューラーは、第 2 次世界大戦以前にコージブスキーによって始められ、戦後のアメリカにおいて著しく展開していた一般意味論の動きに対して、彼なりにコミットしていこうとしている。その最初のきっかけを与えたのは、S・チェイスの『言葉の専制』(The tyranny of words, 1938)であったようである。ビューラーは、『実用意味論』(Practical Semantics)と題する新書版を構想し、そのための原稿を書き残している。この新書版について、ビューラーは、次のように、その構想を述べている。

"This little book in English is based on a bigger one in German; 'Sprachtheorie'(1934) published by Gustav Fischer in Jena. There are some differences between the two, but the main difference is this: While the German book was written for linguists, philosophers, psychologists, this smaller edition in English shall be a gift to

more."([10795])（この英語の小著は、ドイツ語で書かれた大著（『言語理論』、G・フィッシャー社、イェーナ、1934 年）に基づいている。両者の間にはいくつかの違いがあるが、主な違いは、次の点にある。ドイツ語の著書は、言語学者、哲学者、心理学者のために書かれたが、この英語の小著は、もっと多くの人々に向けて書かれている。）

4.4.1 実用意味論の 3 つの対象領域

ビューラーが構想した「実用意味論」は、いわば『言語理論』の実用的応用という性格のものである。その実用意味論は、日常生活において人間にとって有意味となる記号現象を問題とする。残された原稿を読む限りにおいては、実用意味論が取り扱う分野として 3 つが議論されている。その第 1 の領域は、気象現象である。気象学者は、有意味な現象（予兆(Anzeichen)、指標(Indikatoren)）を観察することによって、天気予報を行う。日常生活において意味論が関わりをもつ第 2 の領域は、医学である。医者は、特定の病気の症候、兆候(Symptome)を集めることによって、病気を特定し、処方を決定する。人間の行動が有意味となる第 3 の領域として、ビューラーは、法廷における審理を挙げている。法廷における審理の過程では、証拠(evidences)が集められ、裁判官はその証拠に基づいて判決を下す。ある犯罪を立証するため、どのような物事が有意味であるのかが重要となる。この連関で、ビューラーは、イギリスにおける法制度の歴史的展開を、証拠がもつ信頼性という視点から、詳しく論述している。

ビューラーが実用意味論というテーマの下で取り扱っている領域は、きわめて日常的かつ非政治的とも言える事柄である。この点において、アメリカの一般意味論者たちが、主として政治的言説を分析、批判の対象としているのとは対照をなしている。この点においても、ビューラーは、妻のシャーロッテがいうように、「政治的にナイーブ」(BÜHLER 1965: 187)であったといえるのかも知れない。

4.4.2 なぜ実用意味論なのか？

しかしながら、いくら政治的にナイーブであったとしても、政治は容赦なく個人の運命を変える。1938 年 3 月ナチスがウィーンに侵攻した直後「保護拘禁」(Schutzhaft)の名目で、ビューラーは 2 ヶ月近く獄中生活を余儀なくされた。このことはビューラーにトラウマとして深い傷を残す。書き残された原稿のあちこちにナチス体験を示唆するような表現を見つけることができる。たとえば、記号現象について論述している文脈で、次のような文に出会う。

"During the five decisive years of HITLERs war preparations, his plans were secret, of course, but outside indications could have reveiled enough of them, if only we the democratic people had not been sign-blind and read the sign in time."([19822])（ヒトラーが戦争準備を進めていた最初の決定的な 5 年間というもの、もちろん、彼の計画は秘さ

れていた。しかし、その指標はあったのであり、彼の計画を明るみにし得るものであったといえる。民主主義を盲信するだけでなく、その兆候をちゃんと見、しかるべき時に読みとっていたならば。)

また他の箇所で、証拠のもつ信頼性に関する議論の中で、ビューラーは、拷問について言及し、そしてゲシュタポのやり方を、おそらくは苦い悔恨の気持ちを込めて、次のように皮肉混じりに述べている。

"It was superstition, we think, to believe in ordeals as a source of evidence; it was psychologically unsound to expect that during a duel good luck would be on the side of the better cause, it was a mistake to assume that the confession or testimony forced from a painstricken man is reliable evidence. Those and similar procedures are past or should be past (***even for Gestapo courts, if there is such a thing***)..."([10749])（拷問によって証拠が引き出せると信じるのは、迷信であった。決闘において、よりましな理由がある側に幸運が訪れると期待するのは、心理学的に正常なこととは言えない。苦痛にさいなまれた人間から強制的に引き出された自白や証言が信頼できる証拠であると考えるのは間違っている。そういった手続きは過去のものであり、現在ではあってはならないことである（***ゲシュタポの法廷についても同様である。もちろん、ゲシュタポに法廷と呼べるようなものがあったとしてのことだが***）。（強調は筆者による）

ナチス体験というトラウマを引きずっているビューラーにとって、自ら構築した言語理論が、日常生活においていかなる有用性をもち得るか検証することは、切実な問題であったといえる。ビューラーの意味論が、決して空理空論でないこと、日常生活において価値あることを証明するという問題意識が、実用意味論の展開につながっていると言えるだろう。

5 おわりに

ビューラーが展開した一般意味論的考察が、多くの人々の受け容れるところとならなかったのは、残念ながら歴史的事実である。その理由はいくつかある。一番大きな理由は、ヨーロッパの学問的伝統で育ち、ヨーロッパの心理学をリードしてきたビューラーにとって、アメリカの学問を支配していた行動主義心理学は、批判的統合の対象であり、馴染みのあるものではなかった。それ故にビューラーは、アメリカの学問世界にとけ込むことができなかったのである。しかしながら、ビューラーが残した知的遺産は、近年における認知意味論の展開の中で、再評価されている。また、K・ローレンツが提唱した進化論的認識論、動物行動学との連関においても、ローレンツが如何にビューラーの影響を受けていたかが、科学史的研究の中で明らかにされつつある（HOFER 2001)。間接的ではあるが、ビューラーの仕事が正当に評価されるように

なってきたと言えるだろう。

6 参考文献

BÜHLER, Charlotte (1965): Die Wiener Psychologische Schule in der Emigration. In: Psychologische Rundschau, Band XVI, 1965, S.187-196.

BÜHLER, Karl (1931): Phonetik und Phonologie. In: Travaux de Cercle Linguistique de Prague (TCLP), 4, S.22-53.

BÜHLER, Karl (1932) : Das Ganze der Sprachtheorie, ihr Aufbau und ihre Teile. In: Bericht über den XII. Kongress der Deutschen Gesellschaft für Psychologie in Hamburg vom 12. - 16. April 1931. Im Auftrag der Deutschen Gesellschaft für Psychologie, herausgegeben von Gustav KAFKA, Jena: Fischer, S.95-122.

BÜHLER, Karl (1934): Sprachtheorie. Die Darstellungsfunktion der Sprache. Jena: Fischer (^{2}1965, Stuttgart: Fischer).

BÜHLER, Karl (1982): Sprachtheorie. Die Darstellungsfunktion der Sprache. Stuttgart/New York: Gutstav Fischer Verlag. (UTB 1159)

BÜHLER, Karl (2000): Die Krise der Psychologie, herausgegeben von A.ESCHBACH/ J.KAPITZKY. Weilerswist: Velbrück.

CAMHY, Daniela (1980): Karl Bühlers Sprachtheorie. Inaugural-Dissertation. Universität Graz.

CHASE, Stuart (1938): The tyranny of words. London : Methuen.

ESCHBACH, Achim (1980): Semiotik. In: Lexikon der Germanistischen Linguistik. Herausgegeben von Hans Peter ALTHAUS/ Helmut HENNE/ Herbert Ernst WIEGAND, 2. vollständig neu bearbeitete und erweiterte Auflage. Tübingen: Max Niemeyer, S.41-57.

HOFER, Veronika (2001): Konrad Lorenz als Schüler von Karl Bühler. Diskussion der neu entdeckten Quellen zu den persönlichen und inhaltlichen Positionen zwischen Karl Bühler, Konrad Lorenz und Egon Brunswick. In: Zeitgeschichte 3, 28. Jg. , S.135-159.

LEBZELTERN, Gustav (Hrsg.) (1969): Karl Bühler - Leben und Werk. In: Karl Bühler, Die Uhren der Lebewesen und Fragmente aus dem Nachlass. Herausgegeben und mit einer Biographie versehen von Gustav LEBZELTERN unter Benutzung von Vorarbeiten von Hubert RAZINGER, Vorwort von Hubert ROHRACHER, Wien/Köln/Graz: Böhlau, S.9-70.

UEDA, Yasunari (1987): Bühler in Wien. In: TREFF-PUNKT-SPRACHE, Nr.6, Hiroshima, S.13-24.

UEDA, Yasunari (2002): Zur Sprachtheorie Karl Bühlers und zur Neuorientierung seines Nachlasses. In: Studia Germanica Universitatis Vesprimiensis. 2002/2. （出版予定）